

聖書：創世記 22：9～24

説教題：アドナイ・イルエ

日時：2023年10月29日（朝拝）

創世記のいくつかある大きな山の一つ、22章。アブラハムのこれまでの信仰の学びの成果が試される場面を読んでいます。これまで待つ待つ百歳の時に約束の子イサクがアブラハム夫婦に与えられました。後は幸せな日々が続くだけと思われた晩年の彼に、何とそのイサクをわたしが告げる山の上で全焼のささげ物として献げよ！という命令が神から下りました。一体何ということをして神は仰ったのか。心がかき回されるような命令です。アブラハムはここで彼の信仰の生涯の総仕上げとなる試練・テストを受けました。果たしてアブラハムはこの神の命令に従うのか、それともイサクを大事にして神に従わないのか。もしイサクを大事にして神に従わないなら、それは彼がイサクを神よりも上に置いているということを意味します。つまりイサクはアブラハムにとって神にまさる偶像となります。神への信仰とは名ばかりで、何かあればすぐ神ではないものを選び取って行く結局は偶像礼拝者となります。さてアブラハムはどう応答したのでしょうか。前回見たのはアブラハムの中では神に信頼する心が勝ったということです。彼は神の命令があった日の翌朝早く従い始めました。三日目になって遠くに主が指定された山が見えた時も彼の決心は鈍りませんでした。息子イサクと二人きりで山に登り、「お父さん、火と薪はありますが、全焼のささげ物にする羊は、どこにいるのですか」と問われた時、アブラハムは「わが子よ、神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ」と答えて、なお先へと道を進みました。そうしてついに山の上に着いた場面から今日の箇所は始まります。

9節に「神がアブラハムにお告げになった場所に彼らが着いたとき、アブラハムは、そこに祭壇を築いて薪を並べた。そして息子イサクを縛り、彼を祭壇の上の薪の上に載せた」とあります。イサクは薪を背負って山に登れるくらいの体力がありましたから、少なくとも十代半ば以上だったと思われます。ですから彼はアブラハムの手から逃れようと思えば逃れることができたはず。つまり驚くべきことに祭壇の上で縛られ、自分がささげ物として献げられることをイサクも受け入れたということです。一体どういう教育がそれまでになされたのかと思わされます。たとえ自らのいのちを献げて神を愛し、神に従うことを優先するという信仰に立っていたのでしょうか。

そうしてついにアブラハムは手を伸ばし、刃物を取り、息子イサクを屠ろうとしました。その瞬間、天から主の使いが彼に呼びかけました。「アブラハム、アブラハム」。彼は答えました。「はい、ここにおります」。そして御使いは言いました「その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。」 神はイサクのいのちが欲しかったわけではありません。

神が見ているのはアブラハムの心でした。彼の心の中ではすでにイサクを屠っていました。そこで神は、もうそれで十分！とされたのです。あなたが神を恐れていることが良く分かった！と。この恐れとはビクビクする恐れのことではなく、神を第一に愛し、神に第一の忠誠をささげるという意味での恐れです。そのことが今や明らかにされました。だからもうその子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。そして主は言われました。「あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。」

ここに私たちは大切なことを学びます。それはアブラハムの信仰は外側の行いに現れたということです。神はアブラハムの外側の行いを見て、あなたが神を恐れていることが分かったと言われました。内側にあるものは外側の行動によって確かめられました。このように外に現れ出る信仰こそ本物であるということです。このことについてヤコブの手紙2章21～22節は次のように語っています。「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、行いによって義と認められたではありませんか。あなたが見ているとおりに、信仰がその行いととも働き、信仰は行いによって完成されました。」 ヤコブは信仰があると言いながら、その信仰に行いが伴わないなら、それはむなししいと言って、このアブラハムの出来事に訴えています。アブラハムの信仰は行いととも働き、行いによって完成されました。信仰は神の御言葉に服従する実際の生活に現れ出るものでなければなりません。その行いに、あなたが神を恐れていることが現れていると神が言われたことを私たちも良く心に留めたいと思います。

そしてアブラハムが目を見て見ると、何と一匹の雄羊が角をやぶに引っ掛けていました。アブラハムは行ってその雄羊を取り、自分の息子の代わりに全焼のささげ物として献げました。これはもちろん神が備えていたものでしょう。神は本当にイサクを献げさせようとは思っていませんでした。ただアブラハムの信仰が明らかにされることを望まれました。そしてそれがふさわしく示された暁には、代わりに全焼のささ

げ物として献げられるように、この羊を備えていたと考えられます。前回最後の8節で見た「わが子よ、神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ」というアブラハムの告白は、まさにその通りだったのです。アブラハムはこの場所をアドナイ・イルエと呼びました。今日も「主の山には備えがある」と言われているとあります。山の下にいる時は見えませんでした、山の上にこのような備えがありました。わたしが告げる山へ行け！と言われた神は、そこにきちんと必要なものを備えていました。ですから私たちも主に信頼して従うべきです。主に従うなら山の上には主の備えがあるのです。

さてこれだけでも十分なメッセージが語られているこの箇所ですが、この箇所はもっと大きな絵を描いているものでもあることに私たちは気づいているのでしょうか。以前、私はアブラハムの生涯を描いたビデオを見ていました。そしてまさに今日の箇所、いよいよイサクを山の上でささげようとする時、アブラハムの苦悩する姿が彼の周りをカメラが360度回転するようにして映し出されました。彼は主に信頼してイサクを屠ろうとして刀を振り上げる。そして神から声がかかり、ストップさせられた。その場面を見ていた時、私の目から涙がボロボロと出て来ました。私がそこに見たのは、これは何よりも父なる神の姿であるということです。一人子をささげるために、このような苦悩を味わわれたのは誰よりも神ご自身であった。そして思ったことはアブラハムはその直前でストップをかけられ、一人子イサクを屠らなくて済みましたが、神は私たちの救いのためにご自身の一人子の上に手を振り下ろされたということです。神は私たちのために何という代償を払ってくださったのか。神にとってこれはどんなに大きな犠牲を払うことだったのか。また神はどんなに深く大きな愛で私たちを愛してくださっているのかが迫って来ました。もしかすると初めてこの創世記22章を読む人は、神は何とひどいことを命じる方なのかと憤慨し、蔑む思いさえ持つかもしれません。しかし神は決してご自分がしようとも思わないことを一方的にアブラハムにさせたのではないのです。神はご自分がしようとしておられることを鏡で映し出すかのような歩みへとアブラハムを招かれたのです。ギリギリのところまでご自分に似る者へと導かれたのです。アブラハムは神とともに歩み、神を深く知って歩んで来た人として、見事にその導きに答えたのです。ですからアブラハムほどに、一人子をささげた神の犠牲の大きさと、私たちへの神の愛の大きさを理解できる人はいないのではないのでしょうか。彼は神のみそば近くにまで導かれた人であり、その導きに信仰によって答えた人だったのです。

このアブラハムの応答を受けて主の使いは 15 節以降で再び天からアブラハムを呼び、言われました。16 節の括弧からお読みします。「わたしは自分にかけて誓う——主のことば——。あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しまなかったので、確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。」アブラハムを大いに祝福すること、その子孫を空の星のようにすることは前にも言われていましたが、ここではさらに「海辺の砂のように」と言われています。まさに数えられないほどとてつもなく多いということです。また「あなたの子孫は敵の門を勝ち取る」と言われています。門は力の象徴です。つまり敵に勝利するということです。これまでこの約束は神の一方的な恵みとして語られて来ました。しかしここではアブラハムの服従にもかかっているような言い方がされています。これはもちろん人間の行いが神の祝福を勝ち取るという意味ではありません。先に行いは信仰の結果であると述べました。神への信仰から善い行いという実りが生じます。ですから行いも恵みから生じるものです。ただこうして私たちが祝福されるプロセスには、私たちの行いも位置を持つということが言われているのです。ただ一方的であるだけでなく、私たちが神の恵みに応答して実際に従う歩みをするというプロセスを通して神の祝福は私たちに臨むのです。

またここにおける「子孫」という言葉について、17 節前半では「空の星、海辺の砂のように大いに増す」と言われていますから、多くの人々からなる子孫が考えられていることは確かですが、同時に特別な一人の子孫のことも私たちは考えに入れるべきだと思います。特別な一人の子孫とはキリストのことです（ガラテヤ人への手紙 3 章 16 節）。その方こそ 17 節後半で言われているように、敵の門を勝ち取る方です（マタイの福音書 16 章 18 節）。また 18 節の「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる」という言葉についても、特別な子孫であるイエス・キリストによって地のすべての国々は祝福を受ける！ということ私たちが思うべきでしょう。18 節後半には「あなたが、わたしの声に聞き従ったからである」とあります。ここで言われているのはアブラハムの服従ですが、これはやがて完全な従順の生涯を通して神の民に救いと祝福をもたらすまことの救い主を予表するものでもあります。その方によってこそアブラハムへの約束は真に成就するのです。

最後の 20～24 節はアブラハムの兄弟ナホルに子が与えられたというニュースがア

ブラハムに伝えられたという内容となっています。いくつもの名前が記されていますが、強調されているのはナホルの子の中にベトエルという人がいて、この人からリベカが生まれたというコメントです。リベカはご存知の通り、将来イサクの妻になる人です。ここにも神の備えがあるということはこの箇所は語っているのではないのでしょうか。まだ誰もそのことは知りません。しかしそのような時から主は備えていてくださる神であることが示されているのではないのでしょうか。

アブラハムは神とともに歩み、将来明らかにされる神ご自身の姿を映し出すまでの歩みを導かれました。創世記 22 章で神がアブラハムに繰り返して言われた「あなたが愛している子」とか、「自分の一人子」とか、「その一人子を惜しまなかった」という言葉は、いずれも神がご自身の一人子イエス・キリストを私たちの救いのために与えてくださるみわざを表すのに用いられる言葉です。アブラハムの 8 節の言葉、「神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ」という言葉も、神が将来備えてくださるまことの羊イエス・キリストを預言的に指し示すものでした。従って山の上に備えられていた雄羊はイエス・キリストを予表するものでした。さらに言えば 2 節で神が指定されたモリヤという地名は、聖書で他に 1 回出て来るだけで、それは歴代誌第二 3 章 1 節になります。そこを見るとここは後にソロモン神殿が建てられる場所となったことが分かります。ですからアブラハムが羊を献げた場所の程近くで将来まことの子羊イエス・キリストが献げられたことになります。これらのことを考慮すると「神が備えてくださるもの」として、私たちは第一義的にはイエス・キリストのことを考えるべきであるということになると思います。

しかしそれだけにとどまりません。ローマ人への手紙 8 章 32 節：「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」ここに御子さえも与えてくださった神は御子と一緒に他のすべてのものも与えてくださると言われています。私たちは様々な試練の中で、この信仰に立ちたいと思います。神は私たちのためにご自身の愛する一人子を全焼のささげ物として備えてくださいました。ここに神の私たちに対する愛がはっきり証しされています。そしてその神は御子と与えてくださったからには他のすべてのものも惜しまずに与えてくださいます。これまでも、これからもそうです。私たちはこの神に信頼を置いて御言葉に第一に従う道を進み、備えてくださる神を益々知る者へ導かれたいと思います。神は備えてく

ださる神、アドナイ・イルエであると礼拝し、この神に栄光をささげ、この神を喜びとする神の民の幸いな歩みへ導かれたいと思います。